

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 川本 慎自

本論文は、日本中世の禅宗ないし禅宗寺院の特徴を解明し、それが社会において果たした役割を明らかにしようとするものである。従来の研究では、「清冽な禅宗」とも表現されるように、その宗教的・思想的影響が指摘される一方で、多くの禅僧が荘園経営に携わり、禅宗寺院は室町幕府の経済基盤としても機能するなど、禅宗の経済的な役割も注目されてきた。この相反する二つの特徴について、本論文では禅宗寺院内における教学、とりわけ儒学学習のあり方を分析して整合的に理解し、さらに禅宗寺院が社会にもたらした影響・役割について具体的な考察を試みる。

第一部「禅僧の経済活動と知識形成」では、禅宗寺院の経営を担当した東班衆に注目する。彼らは禅宗の経済的側面を担っていたが、中国禅の「生活即修行」とする思想により、教学を担当する西班衆と対等と位置づけられていたこと、実際に双方は人的にも交流し、教学の場をともにする機会を持っていたことを明らかにする。さらに、そこで行なわれた儒学講義では荘園経営の実務に関わる知識が伝授され、東班衆の中で組織的に継承されていたことを明らかにし、東班衆の経営能力は禅宗寺院の教学、とくに儒学学習の中で培われたものであったことを指摘する。

第二部「禅僧の儒学と足利学校」では、中世儒学の拠点となった足利学校を素材に東国における儒学学習の実態を明らかにする。足利学校の成立の前提として、東国では南北朝期から建長寺出身の禅僧たちを中心に儒学学習が行なわれていたこと、そこでは禅宗や狭義の儒学のみならず、連歌師との交流や天台教学との接点もみられるなど、独自の学問文化圏が想定されることを指摘する。

第三部「儒学に付随する科学知識」では、当時の講義録から禅宗寺院における儒学学習の実態を分析し、儒学学習に付随して農業に関わる知識や医学、数学や計算技術が伝授されていたことを明らかにする。さらに禅僧との人脈や講義の場を通じてそうした知識や技術は禅宗寺院周辺の人々にも広まり、戦国期になると医師や金融業者が生み出されていったことを指摘する。

禅宗寺院における儒学学習は実務的知識・技術の伝授をともなうものであったことを実証的に解明し、それによって中世禅宗の二つの特徴を統一的に理解する筋道を示した点は本論文の成果として特筆される。また禅宗寺院で培われたこうした知識や技術はさらに社会にも開放されていたことを指摘し、近世における学芸・文化発展の基礎を準備した点まで見通していることは、今後の研究の発展を予感させる。東班衆の実態や天台教学との関係など検討を深めるべき余地はなお残されており、また学問文化圏の内実や前近代の「科学技術」の捉え方についても課題を残すが、総じて本論文が今後参照されるべき、独創的な成果であることは揺るがない。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断した。